

## 【翻訳】

オルトルフ・フォン・バイアーラント  
『薬方書』

萩野蔵平、バウアー・トビアス 訳

„Das Arzneibuch“ Ortolfs von Baierland

transkribiert und übersetzt von  
Kurahei OGINO / Tobias BAUER

## 要旨

Das gegen Ende des 13. Jahrhunderts verfasste „Arzneibuch“ Ortolfs von Baierland gilt als eines der wichtigsten medizinischen Fachbücher, wie auch als einer der einflussreichsten Texte der mittelhochdeutschen Literatur überhaupt. Insbesondere im 15. und 16. Jahrhundert erfuhr das Werk in seinen gedruckten Fassungen im gesamten deutschen Sprachraum Verbreitung und behielt bis ins 18. Jahrhundert seine Gültigkeit. Aus diesem volkssprachigen Lehrbuch, dessen Inhalt sich über das Gesamt des zeitgenössischen, durch das Lateinische vermittelten schulmedizinischen Wissens erstreckt, werden im vorliegenden Beitrag insbesondere die dort gemachten Aussagen zur Todesprognostik, zu den „Zeichen des Todes“ (*signa mortis*) betrachtet. Zu diesem Zweck werden hier die relevanten Textstellen, Kapitel 67 bis 72, ins Japanische übertragen.

キーワード：オルトルフ・フォン・バイアーラント (Ortolf von Baierland), 薬方書 (Arzneibuch), ドイツ中世医学史 (Medizingeschichte des deutschen Mittelalters), 死兆 (*signa mortis*)

## (解 説)

以下は、オルトルフ・フォン・バイアーラント (Ortolf von Baierland) 著『薬方書』(Das Arzneibuch) の抄訳である。13世紀の終り頃にドイツ語で書かれたこの薬方書は、15・16世紀においてドイツ語圏全体で最も広く知られた著作の一つであり、18世紀に入ってもなお定評のある薬方書とみなされていた。しかし、日本ではまったくといってよいほど研究がなされておらず、抄訳ではあるが今回の翻訳によりその内容の一端を紹介したい。

著者はその「前書き」において自らを「薬方博士」(doctor der ertzney) と称している。これまでの研究によれば、彼はヴェルツブルクの司教座聖堂参事会の医師として勤務していたと考えられている。また、ラテン語で書かれた医学文献を熟知していることから、当時の医学のメッカであるサレル

ノ大学かパリ大学の医学部で学んだであろうことが推測されている。オルトルフの『薬方書』の特徴は、なによりもまず、それがラテン語ではなく、ドイツ語で書かれていることにある。彼自身は大学で医学を修めたと考えられるが、彼が自らの著書の読者として想定しているのは大学出の医師ではなく、むしろ（大学教育を受けていない）実地医、特に外科医であった。しかも、その内容から判断すると、彼自身もまた優れた実践家であったことがうかがわれる。しかし、医学研究を理論的側面に限定し、実践を下位に見る傾向がなかったわけでもない当時の状況からすると、このことは必ずしも自明のことではなかったであろう。ラテン語を解しないそのような医師のために、オルトルフはラテン語による医学文献を渉猟し、当時の最高の医学知識を整理編集した上で、折衷的なハンドブックをドイツ語で作成した。それが今回紹介する『薬方書』であり、その構成は以下のとおりである。

第1部（第1章－第30章）	第1論－「四大」論、生理学、食餌療法
第2部（第31章－第73章）	第2論－尿についての書
	第3論－脈拍についての学説
	第4論－（偽）ヒポクラテスに基づく診断的・予後的覚え書き
第3部（第74章－第167章）	第5論－内科（līparzenīe）
	第6論－外科（wundarzenīe）

今回、興味深い記述の中から訳出したのは、「死兆」（signa mortis）に関する箇所、第2部第4論「（偽）ヒポクラテスに基づく診断的・予後的覚え書き」の中の第67章から第72章までである。これらの章では、（偽）ヒポクラテスに依拠しながら、「死兆」についての議論が進められる。その記述のタイプをSchäfer（1995）は次の3種類に分類している。1）死の予見の可能性についての一般的な説明：「次の真理を覚えておくがよい。病人が快復するか死ぬかを確実に言えるほどの知恵を持っている人は一人もないということ。判断を誤り、病人の状態を悪化させたり、反対に命が助かることが容易にあるからだ」（第67章）。2）特定の疾病に依存しない予見：「人が左右に寝返りをうったり、手足を伸縮したりするようになればよい兆候である」（第69章）。3）特定の疾病に依存する予見：「体内の潰瘍や腫瘍で膿にまで達するものは、体の表面のものよりもずっと危険である」（第70章）。今回は特に「死兆」の章にしぼって翻訳したが、後期中世において大きな影響力を及ぼしたオルトルフの『薬方書』をさらに詳細に研究することは、中世から近世へにかけての死生観の変遷、さらに近代医学への移行のプロセスについての興味深い知見を提供するものと期待できる。

今回使用した底本は、1488年にアウクスブルクの印刷者アントン・ゾルク（Anton Sorg）によって刊行された初期刊行本に依っている。なお、このテキストはデジタル化されており、以下のアドレスにおいて利用可能である：[http://www.uni-giessen.de/gloning/at/ortolf-plus-textschleppe\\_augsburg-sorg-1488\\_ub-marburg.pdf](http://www.uni-giessen.de/gloning/at/ortolf-plus-textschleppe_augsburg-sorg-1488_ub-marburg.pdf)（2008年10月31日現在）。転写は原典に可能な限り忠実に行なったが、rの様々な書記法はrに統一した。また、テキスト内の段落表示番号には便宜的に¶を用い、原典の各葉の冒頭行に見られる葉番号は[ ]に入れて表示した。なお、本文中の（ ）は訳者による補足である。

(訳)

(第67章)

[¶29葉]

¶これから語るの、名医ヒポクラテスの教えの数々である。

¶名医ヒポクラテスは、過去においても現在においても最高の医師そして権威であり、それはすべての名医によって認められている通りである。ヒポクラテス曰く、「生は短く、医術は長い」。なぜならば、生は日を追うごとに減っていくが、医術は日に日に増えていくからである。それゆえに、彼が自らの教えを簡潔にラテン語で説いたものを、私がこの本においてドイツ語で解説する。さて彼はこう記している。極端に太りすぎた人たちは痩せている人たちより早く死ぬ。そのため、そのような人たちには痩せている人たちよりも少なめの飲食物を与えるべきであると。また、軽い飲み物を時折与え、よく働かせるべきである。なぜならば、そうすることで痩せることができるからである。覚えておくがよい。すべての病気は過度の飲食が原因であることを。それゆえに、何事にも中庸を保つべきであり、そうすることによって人々は病気から快復することができる。しかし、どんな病気でも過度の飲食によるよりも、過度の空腹と渇きによるもののほうが恐ろしい。覚えておくがよい。すべての長患いでは、病人に与える飲食が少なすぎると、大きな害が生じることを。なぜならば、それにより病人が更に重い病状に陥るからである。[¶29葉] 覚えておくがよい。あらゆる熱病やすべての病気においても、水分を多く含む食物が有効であることを。覚えておくがよい。飲物をとる時には、シロップやそれに類するもので体を前もって柔らかくしておくべきであることを。なぜならば、そうすることによって、飲物がより滑らかに体の中を通っていくからである。どんな病気であっても下剤を与えるべきではない。なぜならば、病んだ体はそれに耐えることができないからだ。病人が気絶する場合、眠っている間にその人の状態が悪くなれば、それは死に至る。だが、眠っている間に具合がよくなれば、死ぬことはない。ゆっくりと体重が減っていく人は、またゆっくりと体重が増えていく。逆に急速に痩せる人は、急激に体重が増えていく。覚えておくがよい。食欲がない時に食物を摂取すると、それは病状を重くする原因となることを。というのも、病んだ体ではそれを消化できないからである。次の真理を覚えておくがよい。病人が快復するか死ぬかを確実に言えるほどの知恵を持っている人は一人もいないということを。判断を誤り、病人の状態を悪化させたり、反対に命が助かることが容易にあるからだ。四日熱マラリアは、(四大の) 冷からくるものであれば、秋は長引き、[¶30葉] 冬は治りにくい。しかし、夏は暑さのためよく治る。三日目に発病する場合は、(四大の) 冷によるものであれば、夏は治りにくい、冬は治りやすい。健康な人が多くの薬を服用すれば、病気になる。天候不順の年が来ると、つまり冬が暖かくて雨が多く、夏が湿度が高く寒い場合には、死に至る病気が発生する。秋と冬に発病する人の病気は、長引き、そして死に至るが、春に発症する病気は軽く短い。初めて妊娠する女が、出産が間近なときには、たくさんの薬を飲むべきではない。なぜならば、まず胎児が病気になってしまうからである。それはちょうど、木の実がなっても、わずかな冷え込みで実がやられてしまい、やがて大きくなってもげ落ちてしまうことから見てとれる。覚えておくがよい。飲み物(水薬)を与えると、体に溜まったものが夏には口から、冬には下から排出されることを。覚えておくがよい。寒すぎる時や暑すぎる時には、飲物(水薬)を飲んだり、瀉血したりすることはよくないことを。[¶30葉] 覚えておくがよい。黒い尿、またはすべての黒い排泄物は死の兆し

であることを。覚えておくがよい。すべての冷や汗は病気が長引くことを、さらに病氣中のそれは死を意味することを。覚えておくがよい。人が睡眠後に汗をかく場合、それは、飲食の摂りすぎを意味することを。そうでないならば、下剤により腸をきれいにする必要がある。

(第68章)

理由もないのに、体重が日を追うごとに減っていき、痩せていく人は、まもなく死に至る。人間の一つの身体部位が二つの病気に侵されることはないから、より重い病気がより軽い病気を追い払う。過度の労働が原因で生じるあらゆる病気は、休養をとり労働を控えれば、健康を取り戻すことができる。何であれ人が慣れ親しんだ習慣をやめると、病気になるだろう。長雨による多湿の年には、熱病などの病気がはやり、しかも長く続く。快復に向う病人が、全身に汗をかけば、それは生への良き兆候であるが、頭部にだけ汗をかくときには、致命的である。しかし、病氣の人が汗をかいていても、病状がますます重くなることがあれば悪しき兆候である。[¶31葉] 発汗を抑えなければ病は長引くであろう。水分摂取の後に痙攣やしゃっくりが止まらない人は命が危ない。痢病や頭髪が抜ける病気に罹った人は間違いなく死ぬ。目を患って涙目になっている病人には、発汗浴あるいは葉草入りの葡萄酒を飲ませると極めて効果的である。¶頭痛について。¶頭痛に苦しんでいる人のうちで、不純な(四大の)熱を持つ人には、牛乳は極めて有害である。しかし、痩せていて不純な(四大の)熱を持っていない人には、牛乳は良薬である。頭痛に苦しんでいても、鼻から膿や水や血が出ると、その人は快復するだろう。長い間膿疱を患っていた人が、それを取り除こうとするのは極めて有害である。しゃっくりが続き、嘔吐する人は、食欲不振となる。痢病にかかった人が嘔吐すれば、その病から快復するだろう。[¶31葉] 水腫を患っている人に、咳が出れば、それは悪しき兆しである。水腫を患っている人が、外傷を負うと、その傷は治り難く、致命傷となる。瀉血および葉がよく効く人には、瀉血を頻繁に行い、薬を与えるべきだが、病状が更に重くなる場合には中止すべきである。

(第69章)

¶病気について

¶病気で伏している人の顔が病気に負けず歪むことがなければ、それは喜ばしいことである。しかし、すっかり変形してしまう場合には、つまり痩せて鼻が尖ったり、眼が顔に深く窪んだり、耳が冷たくなり、顔色が緑色あるいはどす黒くなる場合には、しかも痢病でもないのに長く起きていられないときには、その人は死に至る。光をみつめると涙がでたり、睡眠の際に臉に痙攣が起きたり、臉がわずかしか閉じない場合、あるいは目の周りが薄黒くなったり、眉が抜け落ちたりする場合には、[¶32葉] もし痢病によるものでないのならば、その人は死が近いと確信しなさい。しかし、人が左右に寝返りをうったり、手足を伸縮したりするようになればよい兆候である。だが、頭を足に向かって投げ出すような仕草をする場合は間違いなく死亡する。また、病人がうつ伏せに寝る場合も、それが子どものときからの習慣でない場合には、死を覚悟しなければならない。

(第70章)

¶人が歯ぎしりをする場合

¶病人が歯ぎしりをするときは、死あるいは意識不明を意味する。だが意識不明となったのち歯ぎ

しりする時は間違いなく死亡する。病気になり背中に腫瘍ができた場合、それが黒色あるいは緑色となり、膿が流れでなければその人は死ぬ。病に伏している人や体内に腫瘍がある人、気を失っている人あるいは頭痛に苦しむ人が、頭や壁を、また鼻の穴や〔¶32葉〕衣服をつかんでかきむしる仕草をするようなことがあれば、それはすべて死をあらわす。病気で呼吸が速くなり、胸が上下するならば、それは胸か心臓かを病んでいてきわめて危険である。それは病気のために意識不明になることを告げているからだ。冷たい息が鼻の穴からでてきたり、喉が涸れたりするとそれは死を意味する。しかし、病気の人の呼吸が速くもなく遅くもない場合それは良い兆候で、命の危険はない。すべての病気において熱い汗は、病気が短いことの印である。病で体がむくみ、さらに熱を伴う病気にかかった場合、1日で死なずに10日目まで病の床にあり、むくみも熱も緩和しなければ、体内の潰瘍が膿となることを意味する。体の左側に見られるあらゆる腫瘍は、右側のものよりも悪性ではない。体内の潰瘍や腫瘍で〔¶33葉〕膿にまで達するものは、体の表面のものよりもずっと危険である。熱による水腫はすべて、尿が赤く少量でそれが長期に及ぶ時は致命的である。

(第71章)

¶眠りについて

¶夜の睡眠はどれも昼間の睡眠よりも健康的である。不眠は悪い兆候であるが、病気の時には最もよくない。病人が錯乱する危険性があるからだ。人が便所に行き、便が細すぎることも太すぎることもなければ、それは肋骨より下の体内が健康な証拠である。しかし、下からでてくるものが水っぽく、ワインの澱のようであったり、腸から力んで押し出さねばならない場合はよくない兆候である。さらにそれが黒く悪臭を放つ時は危険で、最も危険なのはそれが長く続く場合である。人が嘔吐することがあってもそれにより楽になるのであれば、とくに心配はいらない。皮膚の色が緑あるいは黒くなり悪臭を放つ場合は死に至る。〔¶33葉〕肺や胸の周りを病んでいる人が咳をしても、軽い咳であるならば、快復に役立つ。だが咳が止まらず、皮膚の色が黒や緑になると死んでしまう。胸に痛みのある人の唾が最初は血のように赤くなっている、頻繁に出てくることがなければ大丈夫である。しかし、痢病に罹っている人あるいは瀉血を施してもそれが改善されないときには、肺に潰瘍があり、それが化膿しつつあることを示している。

(第72章)

¶病人の死の兆候について

¶それについての知識は、名医ヒポクラテスとともに墓に埋葬されたため、後世の人は知ることができない。つまり病人はいつ死ぬかをどのようにして知ることができるのかについての知識のことである。顔に膿疱ができ、瀉血を行っても、人がしばしば鼻の穴をかきむしる場合には、その人は19日後に死ぬと覚えておきなさい。膝に膿疱ができ、それが黒い色をしている時に、その病が熱を伴う場合には、その人は〔¶34葉〕18日後に死ぬ。首に膿疱ができた人は、その病に襲われたときにひどい喉の渇きをもよおすときには3日後に死ぬ。左手に膿疱ができると、それが黒い色をしていて、病気になった日に熱い唾がでる場合にはその日のうちに死ぬ。黒い膿疱ができた人が初めて心臓が重く感じられたときには次の日に死ぬ。病人の左手の親指に黒い膿疱ができたときに、あるいは白い膿疱で苦痛を伴わないときに、その病気が下痢を伴う場合には、その人は6日後に死ぬ。左足の中指に膿疱

ができたときには、そしてその病がまるで他人の財産を狙う貪欲さで襲いかかってくる場合には、間違いなく21日後に死ぬ。爪が黒色あるいは白色あるいは緑色になり、額に赤い膿疱ができると、[¶34葉] その人は、その病がくしゃみを伴う場合には、4日後に死ぬ。病人の親指に膿疱ができ、病気になるから患部がとても痒い場合、初めて大量の尿をすることがあれば、4日後の日が沈む前に死ぬ。膿疱が病人の左の耳の後ろにできると、20日後に死ぬ。はしばみの実のような膿疱が目の上にでき、病気になるからなかなか寝つけなくなると次の日に死ぬ。病人の右手に白い膿疱ができ、病に冒されてから食欲がなくなると3日後に死ぬ。まるで燃えているかのような膿疱が左手の耳にできると、病気になるから嘔吐が続くと7日の内に死ぬ。頬の下に豆粒くらいの膿疱ができ、口に唾がたくさん溜まり、性器に痛みがあるときには3日後に死ぬ。

### (原典)

(第67章)

[¶ Das xxix blat] ¶ hie vīdefstu vil ler maifter Ipocras

¶ Maifter Ipocras der höchst artzt vñ maifter d'je geporn ward als jm all mai|fter jehent der spricht das dz leben kurcze feý vnd die kunft lang. wann das leben nimpt ab von tag zetag vnd die kunfte wechßt. darüb lert er kurzlich dife ler in latein die ich in teütfch an difez büch auß|leg. Er spricht daz gar zú veýßt leüt bal|defter bent dann die magern. vnd darübe fol man in mýnder zú effen vñ zetrinckē geben dann den magern. Man fol in ett=|wan ringen tranck geben vnd föllē auch arbeyten. wann das macht fy mager. du merck das alle fucht von überigem trin=|cken vnd effen kömpt. dauō ift die maß güt zú allen dingen. wann dauon werdē die leüt gefund. All fucht feind erger die von überigē hunger vnd durft kömme. dañ dýe von überigem effen vnd trinckē werdent. Merck das in allen langen fuch|ten groffer schad ift ob man in zewenig zú effen vnd zetrincken gibt wann dauō [¶ Das xxix blat] verdirbt d' fiech. Merck dz in allē ritē) vñ in allen fuchten feuchte koft nütz ift. mer|cke dz man den leib als man tranck wöll|nemen vor waichen fol mit fyropel oder wamit es feý wān fo geet es defter fenftilger durch den leib. Man fol kein erzney die czú ftül treibt in keiner fucht geben. wann die natur ift dann zekrancke vnd mag es nit erleiden. Ob d' menfch in einer fucht vnfinnige wirt. ift jm würfer fo es schlaft dz ift tötlich. wirt jm aber fenffter fo stirbt er nit. So der menfch langfā malger wirt d' wirt langfaz wid' veißt. wirt er aber bald mager fo wirt er bald wýd' veýßt. Merck wo dz effen on luft in men|fchen geet das macht fiechtüb. wann dýe natur ift zú kräck vnd mag fein nit ver|deüen. Nun merck vō d' warheit dz keyn menfch nie fo weýß ward d' ficherlich ge|sprechen müg d' menfch stirbt od' genißt wann man mag den fiechen leicht v'warlofen od' man mag jm leicht helfen. Der viertäglich ritt fo er vō kelte ift jm herbft [¶ Das xxx blat] lang vnd in dē wintter müllich zäuertrei|ben. aber in dem summer geet er von der hiez gern ab. Der an dem dritē tag ange=|et wann er vonn hiez ift d' ift jm summer forgfaz. jm wintter geet er leicht ab. Ift der menfch gefund pfligt der dann vil erz|neý er wirt fiech. So das jar nit witeret als es fol also das d' winter warm ift vñ vil regnet vnd d' summer kalt ift vñ feü|chte fo werdent tötlich fucht. Wz fucht in dē herbft vnd jm winter anköpt die feid lang vnd tötlich. jm glencz feind fy leicht vnd kurz. So ein frau vō erft ein kinde wirt tragen. vñ als fy es bald will gene|fen fo fol fy nit vil erzney nemen. wann des ersten ift die frucht zekrancke als du fihest an einez baum d' da plüt daz die fru|chte von eým kleinen froft verdürbt

als ſy dann alt wirt ſo reÿßt ſy ab. Mercke was trancks man in dem ſummer gibtt daz ift güt ob es oben von dem menſchen geet oder fert in dem wintter niden auß. Merck wänß zekalt od' heiß ift ſo ift nit [ ¶ Das xxx blat] güt tranck nemē od' zū aderlaſſen. merck das aller ſchwarzer harn vnd alles das ſchwarz ift ob ein mēſch zū ſtül geet tötlich ift. Merck das aller kalter ſchwayße bedeüt lange fucht vnd in der fucht dē to|de. Merck ſo ein menſch nach dem ſchlaff ſchwiczt dz bedeüt das d' menſch zeuil tr̄cket vnd ſyßt. Ift des nit ſo bedeüt es dz d' menſch einer feüderung bedarf.

(第68章)

Nÿmp|et ein menſch ab von tag zū tag vnd ſch=windet an dē leib on ſach der ſtirbt bald. Seind zwū fucht an einem menſchen nit an eÿm gelid die gröffer v'treibt die min|dern. Alle fucht die von großer arbeit kō|met rüet der menſch vñ tüt ſich arbeit ab d' wirt gefunt. Wes d' mēſch gewont hat laßt er vō d' gewonheit er wirt ſiech. Ift dz jar ſer naß das es vil regnet ſo wirt ri|ten vñ fūchtē vñ die wernt lāg. Ligt eins in d' fucht ſchwiczend an allē ſeÿm leybe an d' bekerūg. ift ein güt zaichē des lebēs ſchiczt er allei am haubt. ift tötlich. ift dz d' mēſch ſchwiczt ī einer fucht vñ dz er ſe [ ¶ Das xxxi blat] krencker vnd krencker wirt. das ift böß dem ſol man dem ſchweÿß weren oder ſy verderbent vnd lengernt die fucht. Ift dz ein menſch nach einem tranck d' krampf oder hefch beſteet das ift tötlich. Ift eÿn menſch ſiech gewinnt es die rür oder das har von dem haubt außfellt der ſtirbt on zweÿfel. Ift ein menſch an dē augen krā=cke vnd ſy feücht ſeind dem ift ſchwayß bad vnd lauter wein getrunckē gar ge=|fund

¶ Von dem haubtwee.

¶ Dem das haubt wee thū vnd die vn|rein hiez haben. den ift milich gar ſchade. doch ift ſy den leüten güt dÿe die dürre habent ob ſy nit vil vnreiner hiez habēt Ift einem menſchen in dem haubte wee. wirt jm aÿter oder waffer oder plüt auß der nafen fließen So wirt er gefund. hat ein menſch die feÿchtplatern lang geha=|bet vñ vertreibt ſy das ift gar ſchedlich Hefchet ein menſch vñ wirt darnach vn|deüen ſo vergeet jm das nieffen. Hat ein mēſch die rür vnd wirt darnach vndeüē [ ¶ Das xxxi blat] ſo vergeet ſy jm. Wirt ein menſch hūften in der wafferfucht das ift böß. Wirt eÿn menſch wund in einer wafferfucht dz hei|let vngern vnd ift tötlich. Ift das dē men|ſchen aderlaſſen vnd ercznej wol kōmpt die föllen oft laſſen vnd erczney pflegē werden ſy aber krencker ſo föllen ſy ſich daruor hūten.

(第69章)

¶ Von der fucht.

¶ Ligt ein menſch in der fucht vnnd ſich ſein angeſicht nit verr verſtellt gegē dē tod das ift löblich. hat aber ſich es ſere v'|kert. alfo das jm die naß ſpiczig ift vnnd die augen tieff jm kopf ſeind. vnd jm dÿe oren kalt ſeind. vnd das angeſicht grün. od' ſchwarz. vnd hat nit die rür vnd au|ch nit lang gewachet hat. ſo wiß das der menſch tötlich ift. Iftt das dem menſchen die augen zāheren ſo er in das liecht ſihet oder daz jm dÿe augen zitterent. oder daz jm auch dÿe augen offen ſteent ſo er ſchla|fet ein teÿl. vnnd das jm auch die augen liecht ſchwartz werdent vnd die prauen [ ¶ Das xxxii blat] niderfallent hat es dann die rür nit geha|bet ſo wiß ſicherlich daz der menſch ſtirbt Du ſolt auch mercken ob d' menſche auff der rechten ſeÿten od' auf der lingen ſeitē hat gelegen das ift ein güt zaichen vnnd das er füß vnd hend von jm vnnd zū jm zeühet. Ift aber das er

fich von dē haubt zū den fūfſſen wūrft das ift on zweifel tōtlich. Ift aber auch das d' fiech auf dē hau=|bet ligt in einer fucht vnnd des von kind auff nit gewonet hat das ift tōtlich

## (第70章)

¶ Ob d' menſch mit den zānē grißgramt.

¶ Ligt d' menſch in einer fucht vnd grýßgramet mit den zānen das bedeut dē tod od' das er vnſinnig will werden. Ift er alber vnſinnig vnd das er dann grißgrāt ſo ſtirbt er on zweifel. Ift der mēſch fiech vñ das jm ein gefchwer am ruggē wirt. vnd das ſchwarz od' grūn wirt vñ das nit fleußt. ift tōtlich. Ligt einer ī einer ſu=|chte od' hat ein gefchwer in jm od' ift vn=|ſinnig od' tūt jm dz haubt wee greift auf dz haubt od' gen d' wād od' in naßlöcher [ ¶ Das xxxii blat] oder auff das gewand vnd wirt dauon zaýſen das ift alles tōtlich. Ift d' menſch kranck vnd den atem drat zeucht vñ daz jm die prüft auff vnd niderfarent das be=|deüt daz er vmb die prüft vnd vmb daz hercz fiech ift vnnd ift gar tōtlich. wann es bedeut in einer fucht das der menſche ſein fýnn verliern will. Ift das jm d' atez kalt zū den naßlöchern außgeet oder das rauhet in der kel das bedeut den tod. Zeü|het aber der menſch in einez ſiechtumb dē atem weder zū drat noch zū langſam dz ift ein gūtes zaichen vnd leblich. In allē ſiechtumb heýfſer ſchwaiß das bedeutet kurze fucht. Ift das der menſch in dē ſie=|chtumb gefchwollē ift vnd ein fucht hat vnd das er nit ſtirbt des erſten tags vnd alſo ligt bis zū xx tagē vñ ſich die fucht noch die hicz nit miñdert bedeut das daz gefchwer in dez leib will zū aýter werdē. Alle gefchwulßt in der gelincken ſeytten ift beſſer dann in der rechten ſeyten. Ift eī gefchwer in dez leib vnd ein gefchwulßt [ ¶ Das xxxiii blat] das es zū aýter greift das ift mer tōtlich in dem leib dann auſſerhalb des leibs. Al|le wafferfucht von hicz vnd ob der harē rot ift vnd wenig vnd ob es lang gewe|ret hat das ift tōtlich.

## (第71章)

¶ Von dem ſchlaff

¶ Aller nachſchlaff ift gefünder dann d' tagſchlaf. Es ift ein böß zaichen d' nit ge|ſchlaffen mag vnd allermait in einer ſu|chte. wann des menſchen ift zefürchtē dz der menſch vnſinnig werd. Geet d' mēſch zū ftül vnd das weder zū dünn noch czū dick ift das bedeut das d' menſch nid'halb den rippen vnd in dē leib gefund ift. Ift aber das wafferuar daz von dem menſch|en nidē kompt od' als weinheffen od' alls das man von dārmē tūt vnd ſchabt. dz ift ein böß zaichē. Wirt aber es ſchwarz vnd ſtinckt. das ift tōtlich. vnd allermait ob es die leng wert. Ift aber das d' mē|ſche vndeüt vnd das jm dauon wirt ley|chter. dz ift nit ſer böß. Wirt aber er grūn oder ſchwarz. od' das es ſtinckt ſo ift es [ ¶ Das xxxiii blat] tōtlich. Ift daz d' menſch an d' lungē fiech ift od' vmb dýe prüft. wirt er hūßtē vnd die hūßt leicht vō jm geet. das ift hilflich geet aber es vngern vō jm od' dz er ſchw|arcz od' grūn wirt. if tōtlich. Ift dē men=|ſchen an d' lungen wee vñ die ſpaichel ift rot des erſtē als dz plāt vñ geet vngerē von jm. ift gūt. gefat jm aber die rūr od' dz man jm zū ad'gelaffen hat vñ jm nitt ſenffter wirt. das bedeut ein gefwer an d' lungen vnd dz aýter wachſſen will

## (第72章)

¶ Vō des tods zaichē am ſiechē menſchē

¶ Die kunſt fand man mit dem mayſter Ipocras in ſeinem grab durch rechte lie|be daz fý nach jm niemant künd

vnd ein kunft wie man erkennen fol an welichē tag d' fiech menfch fterben fol. So dē mē|fchen ein plater wirt am antlücz vnd jm die ader gelegen ift. So merck vnd wiß das d' menfch in neünzehen tagen ftirbt. vnd ob er offt in feine naßlöcher greyft Wirt jm ein plater an dem knie. vnd das die plater fchwarz ift. fo ftirbt d' mēfche [ ¶ Das xxxiiii blat ] an dem achtenden tag ob in der fiechtübe mit fehweiß ankommen ift. Wirt dē men|fchen ein plater an dem halß So ftirbt d' menfch an dem dritten tag der fucht ob in fer dürbt ob den der fiechtag ankomme. Wirt dem menfchen ein platter an der gelincken hand er ftirbt des felben tags ob die plater fchwarz ift. Ob der fiech begetret heýffer fpeýß an dem tag da er ward fiech. Wirt dem fiechen ein fchwarze plater So ftirbt er an dem anderen tag Ob jm das hercz von erft fchwâr was. Wirt dem fiechen ein fchwarze platter auf dē gelincken daumen od' plaich vnd das jm die nit wee thût. So ftirbet er an dem fe|chbtē tag. ob in der fiechtüb mit der rüre ankommen ift. So dē menfchen ein plat|ter wirt auf der mitlen zehen an dem gel|cken fuß. So wiß das der menfch am xxi tag ftirbt. ob in der fiechtumb mit geýti=keýt frömbdes güttes ift ankommē So dem menfchen dýe nagel fchwarze wer|dent oder plaich od' grún vnd jm ein rote [ ¶ Das xxxiiii blat ] plater wirt vorn an d' ftirn. So ftirbt er am vierdē tag ob in d' fiechtumb mit nie=|fen ankōmen ift. Wirt dem fiechē ein plat|ter auf dem daumen vnd daz er fich fer ju|cket da in d' fiechtumb ankam d' ftirbt an dem fünften tag er die funn vndergeett ob er des erften vil harns von jm hat ge|nezt. Wirt dem fiechē ein plater hind' dē lincken orn er ftirbt am xx tag. Wirt dez menfchē ein plater als ein hafelnuß auf den augen. der ftirbt an dē andern tag ob er fchwârlich hat gefchlaffen da in d' fie=|chtag ankam. Wirt dez menfchen ein plat|ter die weýß ift auf d' rechten hand in dez fiechtagen er ftirbt an dem dritten tag ob in nit hat geluftet effen da in d' fiechtübe ankam. wirt dem menfchen ein plater hī|ter dem rechten ore als er verprunnen fej er ftirbt in fiben tagen ob er fer vndeüett da in der fiechtumb ankam. wirt dē men=|fchen ein plater vnder dem kinbackē als eībon d' ftirbt am dritē tag ob er hat vil fpeichel jm mūd vñ jm gmächt wee tūnt

## 参考文献

- James FOLLAN (Hrsg.) : *Das Arzneibuch Ortolfs von Baierland : nach der ältesten Handschrift (14. Jhd.)*. Veröffentlichungen der Internationalen Gesellschaft für Geschichte der Pharmazie e.V. Neue Folge Bd. 23. Stuttgart : Wissenschaftliche Buchgesellschaft 1963.
- Gundolf KEIL : Ortolf von Baierland. In : *Die deutsche Literatur des Mittelalters : Verfasserlexikon*. Bd. 7. Berlin, New York : de Gruyter 1989. 67-82.
- Gundolf KEIL (Hrsg.) : „*ein teutsch puech machen*“ : *Untersuchungen zur landessprachlichen Vermittlung medizinischen Wissens*. Wissensliteratur im Mittelalter Bd. 11. Wiesbaden : Dr. Ludwig Reichert Verlag 1993.
- Gundolf KEIL : Ortolf von Baierland. In : *Lexikon des Mittelalters*. Bd. VI. München : DTV 2003. 1485-1486.
- Ortrun RIHA : *Ortolf von Baierland und seine lateinischen Quellen : Hochschulmedizin in der Volkssprache*. Wissensliteratur im Mittelalter Bd. 10. Wiesbaden : Dr. Ludwig Reichert Verlag 1992.
- Daniel SCHÄFER : *Texte vom Tod : Zur Darstellung und Sinnggebung des Todes im Spätmittelalter*. Göttinger Arbeiten zur Germanistik Nr. 620. Göttingen : Kümmerle Verlag 1995.
- Daniel SCHÄFER : *Signa mortis : Antike Vorgaben und spätmittelalterliche Ausprägungen*. In : *Würzburger medizinhistorische Mitteilungen* 16. 1997. 5-11.

(付記)

本稿は、平成20年度科学研究費補助金・基盤研究（C）の研究課題「15・16世紀ドイツ本草書のヨーロッパ諸国への影響について」（課題研究番号18520234、研究代表者：荻野蔵平）の成果の一部である。